

地内鎮座。或稱「龍灯社」。毎歲十二月晦夜有「龍燈之奇事」故也。』とある。明治中同地奈古司社に合併せられた。

サイシヨウボウ 西正坊 鳳至郡穴水の川島寺十六坊の一で、眞言宗に屬し、天正中上杉謙信の軍が亂入の時、寺社共に焼失した。

長氏歴代の祈願所であつたから、連龍の金澤移轉の後、住職惠範もその地に遷り、西正坊を眞福院と改めた。

サイシヨシゲツグ 才所重次 通稱治郎太夫。慶長十五年前田利長に仕へ、元和三年百五十石を領した。子孫相繼いで藩に仕へる。

サイシヨムネノリ 才所致了 通稱又六。貞享三年幼にして父又七の祿三の一を受け、元祿三年本知百五十石に復し、堂形奉行・江戸御廣式番・町同心を經、享保十一年榮君附御用人となつて五十石を加へ、十九年指除かれ、後割場荒物裁許となり、延享二年八月七十歳を以て歿した。

サイソコカツセン 犀來合戦 弘治三年先に加賀に遁れた温井備中景隆・三宅備後長盛兄弟は、一向一揆の援を得て能登に侵入した。畠山義則乃ち上條織部・神保周防を鹿島郡金丸に、三宅小三郎宗隆・畠山將監を小金森に出したが、織部等は温井軍が福水から退却したとの誤報を信じ、その兵を率ゐて七尾に歸つた。之に對して景隆は金丸に向かうたが敵を發見しなかつたから、小金森方面の長盛の軍と合し、叔父温井景貞亦之に力を戮はせて、犀來及び二宮に進み、大に七尾軍に勝つた。犀來合戦又は二宮合戦といふもの即ち是である。以上は長家家譜の説である。犀來は犀木の端とも書いて、最勝講の當字だと

いふ。
サイセキガン 采石巖 江沼郡山中温泉附近の名勝の一つで、山中川の中にある磐石である。大窪詩佛曾て之に采石巖の三字を刻ましめた。
サイゼンジ 西善寺 鹿島郡土川に在つて、眞宗東派に屬する。
サイゼンジ 西善寺 鹿島郡萬行に在つて、眞宗東派に屬する。明治四十二年常陸結城郡中山から移轉して來た。
サイダ 才田 河北郡五ヶ庄に屬する部落。源平盛衰記壽永二年の條に、『加賀國井家・津播多・荒井・閑野・竹橋・大庭・崎田・森本まで繼きたり。』とある崎田は是である。天正十四年黒津舟産子村付の前田利家印書にも、亦崎田村と記されてゐる。
サイタキ 犀瀧 石川郡犀川の支流二又川の最奥にある瀧。
サイダサンバク 齋田三八九 金澤の俳人。盲者で、松丈園といひ、通稱を雅號とした。明治三十年七十一歳を以て歿。
サイダタンジ 齋田丹貳 初め與一右衛門。御歩小頭となつて新知百石を受け、享保元年坊主頭に任じ、文化九年歿。その子與八郎秀茂に至つて組外に列した。
サイダチトジ 齋田千十二 金春流大鞍の名手で、加賀藩の御手役者であつた。初名を章助といふたが、安永九年正月二十日前田重教の命に因つて千十二と改めた。その子孫亦千十二を稱したものがあつた。
サイダヤイサブロウ 齋田屋伊三郎 能美郡佐野の人。號は道開。天保元年若杉紫の橋本屋安右衛門に聘せられて陶畫に従事し、六年自ら佐野に窯を開き、二度燒の法を工夫して、大に着書を改良した。明治五年六十五歳を以て歿。
サイダヤキヨエン 才田屋舉遠 金澤の俳人。名は四郎兵衛。柿丸舎三代を繼席した。
サイダヤストモ 齋田安知 通稱七左衛門。慶長十九年前田利常に仕へ、祿四百石を受け、大坂再役に五月七日岡山口で討死した。子孫世々藩に仕へる。一書に齋田を齋藤に作るものは非である。
サイチユウチュウエン 在中中淹 臨濟宗の僧。能登の人。上洛して龍湫澤和尚の許に剃髮し、龍湫から印可を付せられ、相國寺に出世し、天龍寺・南禪寺に歴住した。正長元年十月七日八十七歳で歿。
サイチヨウバタケ 在應島 石川郡八幡に在る。それを國衛の所在であると説くものもあるが、國衛は能美郡にあらねばならぬから失當である。白山本宮の在應の料田であらう。在應は交替に月番する神人である。
サイトウオリベ 齋藤織部 父豊左衛門は最上義光を牢浪して加賀に來た人。織部、元和元年前田利常に仕へて五百石を受け、御馬廻に班した。子孫五代源太夫方良に至つて斷絶した。
サイトウキユウエモン 齋藤久右衛門 越前府中に於いて前田利家に仕へ、天正十一年二百俵を受け、十三年又二百俵を増して、御小將に班し、慶長十九年歿。子孫八代兵三郎百二十石を受け、御異風を勤めたが、天明元年十二月出奔して斷絶した。
サイトウクニタダ 齋藤國忠 應永廿九年加賀富樫郷に生まれた。初名甚之助。舅村上

永幸に馭馬の法を受け、足利義政に師範し、文安元年從五位下備前守に叙任し、延徳三年五月三日富樫郷に卒した。年七十。

サイトウクニモト 齋藤邦基 通稱小三郎。忠太夫。寶永六年父忠左衛門繁長の遺知二百五十石を襲ぎ、大小將・割場奉行・大小將横目を經、享保十三年榮君附物頭並となり、元文三年百五十石を加へ、寛保三年四月二日四十九歳を以て歿した。

サイトウクニヨシ 齋藤國好 父は國忠。文安三年加賀富樫郷に生まれた。兵庫頭と稱して騎馬を善くし、將軍足利義尚の師範となり、永正十年三月十日富樫郷に歿した。年六十八。

サイトウケンテツ 齋藤玄哲 大聖寺藩醫。諱は保、字は子哲、蘭學と號した。越中高岡の人内藤玄漢の子。寶永六年十一月九日生まれ、十九歳大聖寺侯の醫齋藤玄春の嗣となり、終に養父の祿を襲いで二百石を受けた。明和五年十一月廿九日六十歳を以て歿し、長子應龍字は伯淵家を襲いだ。

サイトウケンテツ 齋藤玄哲 大聖寺藩醫。諱は應龍、字は伯淵、蘭學又は三秀館と號し、父玄哲の後を襲いで二百石を受け、良醫を以て稱せられた。文化八年六月廿七日六十六歳を以て歿し、男秀字は應祥、その家を嗣いだ。

サイトウサネモリ 齋藤實盛 (一)實盛の系圖一 大日本史氏族志によれば、齋藤氏の先は鎮守府將軍藤原利仁である。利仁の子叙用齋宮頭となつたから、子孫齋藤氏を稱したといふ。叙用の子吉信伊傳を生み、伊傳は越前の押領使となつた。伊傳の子爲延亦七國押領使となり、爲延の弟則光に至つて吉原氏を稱

す。永幸に馭馬の法を受け、足利義政に師範し、文安元年從五位下備前守に叙任し、延徳三年五月三日富樫郷に卒した。年七十。

す。永幸に馭馬の法を受け、足利義政に師範し、文安元年從五位下備前守に叙任し、延徳三年五月三日富樫郷に卒した。年七十。

す。永幸に馭馬の法を受け、足利義政に師範し、文安元年從五位下備前守に叙任し、延徳三年五月三日富樫郷に卒した。年七十。